公益社団法人船橋法人会　会長賞
領収書が教えてくれたもの

船橋市立飯山満中学校
第一学年　須田　結翔

買い物をするたびにもらう小さな紙きれ、レシートや領収書。以前の僕にとって、それは財布の中でかさばるだけの、ただの紙くずのような存在だった。レジで「レシートはお使いですか。」と聞かれても断るか受け取っても中身もろくに見ないで折ってすぐにゴミ箱へ捨てていた。しかし、僕自身が病気になって入院した時の経験を通して、手元に残る一枚の紙が持つ意味は大きく変わった。

僕は以前、病院に入院して何ヶ月も病院で手厚い治療を受け、先生や看護師さんたちに温かくケアしてもらった。退院の日、不安と期待が入り混じる中で受け取った請求書の金額は、わずか三千円だった。最新の医療設備を使い、たくさんの医療スタッフの方々にお世話になったのに、なぜこれほど安く済むのだろうと、僕は不思議でたまらなかった。手元にある三千円と書かれた領収書を眺めながら、疑問は膨らむばかりだった。

気になって調べてみると、そこには日本の公的医療保険制度や、自治体による子どもの医療費助成制度の存在があることを知った。そして、その制度の根底を陰でしっかりと支えているのが国民のみんなが納めている「税金」だったのだ。僕が受け取った領収書の「三千円」という金額は、実際にかかった医療費のほんの一部に過ぎず、残りの大きな金額は社会全体の税金や保険料によって賄われていた。

その事実を知った時に、小さな領収書の見方がガラリと変わった。一枚の紙に印字された金額の背景には、顔も知らない多くの人々が納めた税金と、お互いを支え合う社会の仕組みが存在している。領収書は単なる支払いの証明ではなく、僕自身が社会に守られ、生かされている事を示す温かい証だったのだ。

僕たちは普段、買い物をする時に消費税を払っていても、それがどのように自分の生活に役立っているかを実感する機会は少ない。しかし、自分が病気という困難に直面したとき、税金は「医療」という直接的な形で僕を救ってくれた。誰かが納めた税金が僕の健康と未来を守ってくれたように、僕たちが納める税金もまた、巡り巡ってどこかで誰かの安心や笑顔に繋がっている。

一枚の領収書は、お金の価値だけでなく、税金を通じた社会の助け合いの温かさを教えてくれた。中学生の僕も、買い物をすれば消費税を納める立派な納税者の一人だ。これからは手に取る一枚一枚のレシートや領収書を見るたび、社会への感謝と、みんなの財産である税金の大切さを心に刻んでいきたい。そして将来、社会人になった時には、今度は自分が誰かを支える番として、誇りを持って税金を納めていきたいと思う。